

マンゴーとバオバブの国から

木多村 知美*

“Misaotra betsaka”

2014年3月。マダガスカル首都アンタナナリボで、最後の研究報告をした際の締めくくりの言葉は、拙いマダガスカル語のお礼の言葉でした。

“Misaotra betsaka” マダガスカル語で「ありがとう」という意味になります。

2010年、初めてマダガスカルの地を踏んだときは、マダガスカル語はおろか、もう一つの公用語であるフランス語すらおぼつかず、2011年から、マダガスカル北西部の港町マジュンガに、5歳未満児の健康調査に入り始めたときは、不安と期待の入り混じった気持ちでいっぱいでした。そんなマジュンガでは、街中でも、病院の中でも、大きな、どっしりしたバオバブの木がみられ、気持ちが慰められたのを覚えています。

学生時代も、日本の病院で働いていたときも、将来マダガスカルで仕事をすることがあるとは想像もしていませんでした。そんな私が、国際保健の世界に少しずつ惹きつけられたきっかけは、「国境なき医師団」のパンフレットに載っていた、栄養失調の治療でした。世界保健機関(WHO)や国際連合児童基金(UNICEF)をはじめとする国際機関が共同で作った栄養失調治療ガイドラインによれば、発展途上国といわれる国での栄養失調に対する治療は、医療施設での治療と、自宅で行える治療に分けられています¹⁾。医療施設での治療は、本人の臨床症状にもよりますが、「1日8回(3時間おき)の栄養素の入ったミルク投与と嚴重な全身管理」と規定されています。医療資源に限りのある場合も多いため、最低限のモニタリング

と検査で治療を行っていきます。この治療をパンフレットで見た際に、「新生児の治療にとっても似ている」と感じて、「もしかしたら、自分の臨床経験が、ほかの国でも役に立つことがあるのかもしれない」と思ってしまったのが、国際保健の扉を開く鍵になりました。

その後、イギリス・リバプールにあるリバプール熱帯医学校で、熱帯小児科学というコースに1年かけて通い、熱帯で流行する病気の診療や栄養失調の治療、予防接種をはじめとする小児予防医学に関して学んだ後、国立国際医療研究センター国際医療協力局に就職し、今度は、それがマダガスカルに派遣されるきっかけになりました。

国際医療協力局では、2010年まで、独立行政法人国際協力機構(JICA)を通して、マダガスカルで行われていた妊産婦・新生児・小児の健康改善のためのプロジェクトに、専門家を派遣していました。プロジェクトでは、病院でのケア改善のほかに、村で、病児ケアに関する啓発活動やマラリア・肺炎・下痢に対する簡単な投薬治療ができるように、村人の代表に研修を受けてもらったりしていました。プロジェクト終了後、プロジェクトが行った施策が継続されているか、現在の子どもの健康状態はどうなっているのかを調査する人材を探していました。そんななか、「マダガスカルに行けるけど…」と声をかけていただき、「『星の王子様』に出てくるバオバブの木のある島」という知識だけで、渡航を決めてしまいました。

マダガスカルは、2012年のデータで、5歳未満死亡率が58/1000出生(日本は3/1000出生)、死亡原因は肺炎・下痢・マラリア、加えて新生児期の仮死や感染で命を落とします^{2,3)}。また、5歳未満児で、低体重の子どもは36%を占め、そのなかでも重症栄養失調は15%の子どもにみられま

KITAMURA Tomomi

* 国立国際医療研究センター国際医療協力部派遣協力課
E-mail: tomonikit@gmail.com



お祖母ちゃんに抱っこされて、笑顔の赤ちゃん



調査の際、体重測定に協力してくれた男子

す。2013年には、イナゴの大量発生があり、食糧不足とともに、栄養失調の悪化が心配されている国です。そのため、マダガスカル政府は、以前から国際機関の協力を得て、さまざまな歳未満児の疾病や栄養失調に対する対策を行っており、私が赴任した北西部のマジュンガでも、JICAプロジェクトが村での病児ケアに対する活動を行っていた以外にも、半年ごとに身長・体重を測定し栄養状態をモニタリングする施策や、重症栄養失調に対して病院で治療が受けられるようなシステム構築、合併症のない栄養失調に対しては、自宅でも簡単に摂れる栄養素を供与するといった対策を行っていました。また、JICAプロジェクトが入っていた地域では、地域のNGOが、村人に向けて栄養に関する啓発活動を行っていました。

そんなマダガスカルですが2009年に政変が起こり、国際社会には認められなかった暫定政権下で、協力を行っていた国際機関は次々に撤退、さまざまな政策が滞るなか、小児の健康・栄養に関する施策は、現地の方の努力により、細々と続けられていました。

2011年に、私が現地に赴任するようになった当時、言葉の壁もあり、なかなか現地の状況がつか

かめず、滞在用のビザを取得するのすら一苦勞、研究の許可をもらうにも時間がかかり、何度も駄目だと思ったものでした。そのたびに、研究事務所のある病院の助産師さんたちに、「Tsy mangahy (きっと大丈夫)」と慰めてもらっていました。

ようやく研究の許可が下り、村に調査に入れるようになると、日本人の私から見ると、非常に厳しい環境で暮らしている村の人たちの笑顔に元気をもらうようになりました。村の子どもたちは、自分たちと違う外国人が村に来たのが珍しかったようで、顔を見た途端に泣かれてしまうこともあれば、珍しくて仕方がなくて、私のマダガスカル語では全然コミュニケーションができないにもかかわらず、それでも一生懸命話しかけてくれる子もいて、マンゴーの季節には、美味しそうにマンゴーを眺めていたら、木に登って、たくさんのマンゴーを取ってきてくれたこともありました。

調査では、5歳未満の子どもの身長・体重測定のほかに、母親に、病気に罹ったときの対応や予防接種歴などを聴取しました。今回の調査では、とくに下痢に罹ったときの対応に関して聴取しましたが、啓発活動が行われていた村の集落では、母親の知識も正確でした。また、栄養失調に関し



ても、低体重児・重症栄養失調児の割合は、2012年の全国データと比較して低いという結果でした。コホート調査という調査の性質上、これらの結果をプロジェクトやNGOが行ってきた活動の結果と結論づけることはできませんが、継続してきた現地の方には、多少なりと嬉しい結果ではあったようでした。ただ現在、活動を継続していく資金に乏しく、活動を担当してくれていた保健省の方たちは、一様に、「活動を始めるのは簡単でも、継続していくのは難しい」と溜息をつきます。

マダガスカルでは、2013年10月に政変後初の大統領選挙が行われ、国際機関が支援に戻ってくる兆しがあります。マンゴーとバオバブに囲ま

れ、明るい笑顔のマダガスカルに明るい兆しに戻ってくることを願いつつ、いつか、皆さんも、マダガスカルへ Tonga soa! (ようこそ!)

文 献

- 1) World Health Organization Programmes and projects Nutrition Nutrition health topics <http://www.who.int/nutrition/topics/malnutrition/en/> (2015年3月12日アクセス)
- 2) UNICEF Madagascar Statistics http://www.unicef.org/infobycountry/madagascar_statistics.html (2015年3月12日アクセス)
- 3) UNICEF Japan Statistics http://www.unicef.org/infobycountry/japan_statistics.html (2015年3月12日アクセス)

* * *